

Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



みすず書房の本棚

[無料送付]

No.2 2012 春

(表示価格は消費税込です)

113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

アフォーリズム集のような ペーター・ツムトアの建築論

深澤直人



「あたかもそれが昔からそうであったかのように見えるようにしたい」。スイスの建築家ペーター・ツムトアのことばである。

グラウビュンデンの山間の小さな街にある駅で降りて、まずはツムトアのアトリエを探したが見つかり難い。周りの家の木質と色が同化していったせいか、ひっそりと佇んでいる一見普通の家を見たときに、そうかとうなずいた。普通でありながらコンポジションやディテールが緻密である。「変哲もない日常の、あたりまえの事物のなかに特別な力が宿る」という彼のことが思い浮かぶ。

街の両側に聳えたつ山の稜線には同じかたちの家がぼつんぼつんと建っている。つづらおりの道を上がると写真で見た「ガガレン・ハウス」が見える。車を降りて緑の草の上を人が歩いた跡に沿ってできたあぜ道を少し下ると、斜面ぞいのその家の全体が見えて来た。昔から変わらないかたちのスイスの家屋の山側半分を

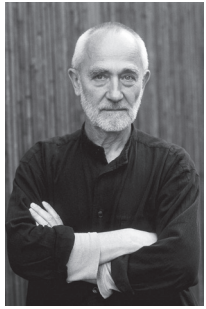
つくり直した家の、板張りの外壁はまだ新しく、日焼けして変色した前側との色がくつきりと違う。いずれは同じ色になるのだろうが、新しくした方の窓や雨戸の位置やかたちがミニマルで、屋根に通った固定のパイプのシンプルなデザインさえどこかモダンだ。さらに道を行くと「聖ベネディクト教会」が見える。小さな礼拝堂の中には白木のベンチがあり、その背もたれ、あるいは祈りの際に肘をつく一本の角材の角の丸みの優しい感触に触れて、光に包まれた優しい雰囲気は一瞬浸った。

15年くらい前だったと思う。私がペーター・ツムトア存在を知ったときに勝手に空想した場面がある。そこには、よく知られた特徴(記号)的な建築で有名な建築家たちを囲んでいくつもの人だかりの輪ができてぼつんと立っている静かな男の姿が見えた。ツムトアである。その場の雰囲気馴染めないかのような、こ

躍世界に知らしめた、地元の御影石で築かれた「ヴァルス温泉」は現代建築の記念碑。数々の建築賞を受賞し、二〇〇八年には高松宮殿下記念世界文化賞、二〇〇九年には建築界最高の栄誉プリツカー賞を受賞。

建築家の 芸術的使命

ペーター・ツムトア
《建築を考える》
鈴木仁子訳



Peter Zumthor

「私建物のなかに、自分の気

ういう場では今までに見かけたことのない姿だった。しかし放っている彼の鈍い光にみんなが一致に振り向き、一瞬にして引き寄せられていくような気を感じた。場と関係なくシンボルとしての建築を建築家の建築としていたるところに建てることを疑わなかった人たちが、一斉にツムトアの作品に同調し、今まで刺激を得つつもなぜかしっくりこなかった疑いの感触が明らかになったような瞬間だった。そのときのツムトアは既に経験豊かな建築家だったと思うが、世間には俗っぽく知られてはいなかったと思う。そのときの作品から彼を想像すると、スイスの小さな集落に住み、そこに建物(家)を、必要に応じて、こつこつと一人で建てる大工さんのような、あるいは村の建築屋さんのような存在に見えた。

ツムトアの著書『建築を考える』は、著者が長い間建築(ものづくり)に関わってきた中でその作業に重なるようにして浮かび上がった思いを

に入ったことだけをする少年がいます。彼は人びとにそれをいいたいと思っでもらいたい、みんなに、ちよつと頭を撫でて、よくやったねと言ってもらいたい。ただそれだけなのです。

野を越えて、あらゆる分野の実作者の精神に働きかける言葉であふれている。風景、光、美を愛し、つくり出すものに真直さを与えることこそ自分の仕事だと著者がこの建築家と、同時代に出会えたことの幸運を思いながら、くり返しくり返し読んでいただけだと願う。写真||杉本博司||ブックデザイン||葛西薫

【五月上旬刊】『建築・デザイン・美術』(A5変型函入126頁・予価三七八〇円)

の場の雰囲気をつくろうとしている。内側から見れば建物が容器として身体を取り囲み、外からはその場の中に埋没して調和していることではじめて沸き立つ雰囲気がつくろうとしている。その雰囲気にはその建物にこれから関わっていく人の無自覚で多層な過去の記憶も介在している。作家であるツムトア自身の記憶からのエッセンスも混入する。

「建築はメッセージでもなければサインでもない。そこで営まれる生を囲む殻であり、背景である。(…)繊細な容器なのだ」

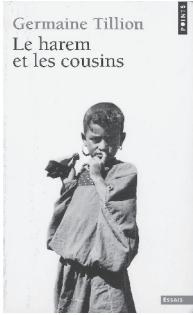
我々の生の世界は物質と媒質(音を伝える空気や光を通す空間)で埋め尽くされている。その中に人工物として大きく存在するものが建築である。その物質は自然や他の人工物例えば街や集落という物質と調和して溶け込んだ雰囲気や自然に醸し出さなければならぬ。スイスの地で建築をはじめたツムトアは、自然に溶け込んだ山の稜線を無闇に崩さずに来た母国の必然の歴史に沿ってデザインをするなかで、こうした思考を強めていったのではないか。周りとは関係ない孤立した建物の分子が集まってできた街を見たくない。

「『なんでもできる』遣り手たちの世界ではそんな言葉が聞かれる。(…)『もうなにも立ちゆかない』、現代社会の不毛に苦しむ人々はそう言う。これらの発言は、相反する事実とは言わぬまでも、相反する見解を表している。私たちはどうやら矛盾とともに生きることに慣れてしまったようだ。(…)あらゆるものが混じりあい、マス・コミュニケーションは記号からなる人工的世界を作りだしている。なにがどれであつてもかまわないような世界だ」

「この本があつて救われる人は多いと思う。」

「どのような家も特定の目的、特定の場所、特定の社会のために建てられている。その単純な事実から導かれる問いに、能力の及ぶかぎり厳密に、批判的に、自分の建築で答えていくこと、私のしているのはその努力である。」(「はずべて文中より」)

(ふかさわ・なおと デザイナー)



Germaine Tillion
Le harem et les cousins

著者のピダハン研究を、認知科学者ステイヴン・ピンカーは「パーティーに投げ込まれた爆弾」と評した。ピダハンはアマゾンの奥地に暮らす少数民族。四〇〇人を割るといふ彼らの文化が、チヨムスキー以来の言語学のパラダイムである「言語本能」論を揺るがす論争を巻き起こしたというのだ。

「イトコたちの共和国」と名付けられた地中海社会の特徴とは、近親婚をも回避しないほどの内婚制への志向である。女性の交換で共同体を維持する「義兄弟たちの共和国」血縁関係を問わない「市民たちの共和国」と対比されることにも貢献した。二〇〇八年に後、フランス各地で様々なシンポジウムが行われている。「世紀の女性」と呼ばれ、尊敬を集めつつある民族学者

女性抑圧の象徴として今も激しい論争を呼び起こすヴェール問題。本書はヴェールをはじめとする女性の隔離がイスラームの教義ゆえではなく、地中海社会の親族構造に由来することをほじめて論じ、大きな影響を与えた。

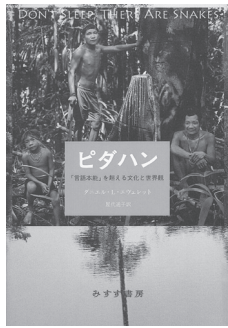
の第三の社会が、女性の地位の鍵となる。先史時代から現代まで、北アフリカから南ヨーロッパまで及ぶ「イトコたちの共和国」の秘密が壮大なスケールで紐解かれていく。著者ティオンはフランスを代表する民族学者。レイヴィストロースの同時代人で、モリスに学び、レジスタンス活動に参加。強制収容所に監禁され、ゲシュタポに博士論文を没収されるが、解放後に民族学者として偉大な仕事を成した。しかし科学革命と呼ばれる時期を経て、「鳥は飛ぶ方を知らない」と言える時代が訪れる。科学革命とは、知識とそれを獲得する方法の構造が全面的に再構成された革命だったのである。

社会構造からヴェール問題を解明

ジェルメーヌ・ティオン 《イトコたちの共和国》
高橋美江子訳 地中海社会の親族関係と女性の抑圧

言語を生みだすのは本能か、文化か

ダニエル・L・エヴェレット 《ピダハン「言語本能」を超える文化と世界観》
屋代通子訳



ピダハン

「この文化が何百年にもわたって文明の影響に抵抗できた理由、そしてピダハンの生活と言語の特徴すべての源でもある、彼らの堅固な哲学とは……？」著者はもともと福音派の献身的な伝道師としてピダハンの村に赴いた。それがピダハンの世界観に衝撃を受け、逆に無神論へと導かれてしまった。ピダハンを知ってから言語学者としても主流のアプローチと袂を分かち、本書でも普遍文化への批判を正面から展開している。【三月下旬刊】

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

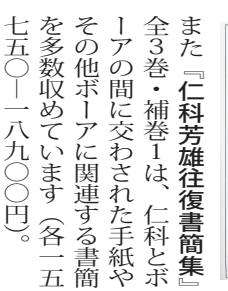
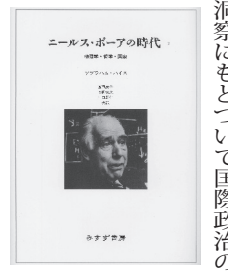
「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

なぜ学生運動が、なぜこの時点で?

ノルベルト・フライ 《一九六八年 叛乱のクロバリスム》
下村由一訳

コペンハーゲン精神の形成

A・バイス 《ニールス・ボーアの時代》
西尾成子他訳



「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

老化とはなにか

マイケル・R・ローズ

《老化の進化論 小さなメトセラが寿命観を変える》
熊井ひろ美訳

生物はなぜ老いるのか、なぜ寿命があるのか？ 老化を「徐々にせり上がっていく壁」と見なし、「この壁をどうすればより晩年に移動させることができるのか」と捉える従来の寿命観は、「まったくの間違っていた」と著者は言う。本書では、進化生物学のアプローチで見えてきた老化と寿命の新たな意味を、この分野の研究の第一人者が説き明かしている。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまであまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが、六八年以後はほとんど何ひとつもとのままだではなくなった。」一九六八年を中心として世界各国内で起こった学生運動とは何だったのか。小英二『一九六八年』は、はじめ日本国内でもこの問題に迫った本は多く、各国でも同様の動きがある。しかし、この運動を世界的に位置づけて分析した本は少なく、本書はなかでも最も評価の高いものである。

みすず書房新刊

(2011・11・2012・2)
東京・文京本郷5
113-8403
(価格は税込です)

- 盲目の女神 20世紀末戯曲拾遺 小笠原豊樹 トライ・表題作他カイザー、オデッセイ、アンドレイエフ、アラゴン、デズノス、ウィリアムズの八篇。八一九〇円
- カフカノート 高橋悠治 同名舞台上演台本、スコア、創作ノートが二冊に、著者新訳のカフカ断片を讀むとカフカがもっと近くなる。三三六〇円
- カフカ/夜の時間 メモ 高橋悠治 始まりは病死で読んだカフカ。中心も終わらない創作活動への夢が静かな文で綴られた。かけがえのない本。三三六〇円
- アイ・ウェイウェイは語る オクリスト 米誌「タイム」も選んだマルチア・アレイスト・アモス。その人生と創作の哲学が必読の対談集。坪内祐三解説。二二六〇円
- 写真の秘密 ガルニエ 自身のカメラと人生を軸に、親しい作家や友人たちの肖像を写し取った長老作家の芳醇なエッセイ。宮志朗訳。二七三〇円
- 被災地を歩きながら 考えたこと 五十嵐太郎 復興はいかにあるべきか。震災発生から半年間の推移と展望を綴った渾身のレポート。丸山修二訳。二五二〇円
- 詩の樹の下で 長田弘 生まれ育った福島の悲劇。樹木に思いを馳せ死者と土地への祈りを込めて捧げられる39篇の散文詩集。好評三刷。一八九〇円
- 異文化コミュニケーション 学への招待 鳥飼敦孝他編 言語と文化の問題を人文科学として精緻化した論集。通訳翻訳学、言語学、環境学の最新成果を集めた。六三〇〇円
- トクヴィルで考える 松本礼二 二十世紀にトクヴィルは何を語りかけてくるか。「アメリカのデモクラシー」を讀解しはじめ現代の意味をさぐる。三七八〇円
- 親切的進化生物学者 ジョージ・プリンスと利他行動の対峙 ハーマン「毎日」解読面紙で書評「利他行動の進化を探る」の道を探る。四四二〇円
- バウムテスト研究 いかにして統計的解釈しているか ストラ 描かれた木から、いかに被検者の深層意識に接近するか。圧巻の実用的サインと解釈の新天地。阿部恵一訳。七九八〇円
- シモーヌ・ヴェイユ選集 1 初期論集・哲学修業 アランの授業に提出した哲学論考、文学論など初邦訳の24篇。全3巻の選集のトップを飾る若き日の論文集。富原真司訳。五〇四〇円

書評コラム

国家と党組織とが一体化し、息のつける社会が締め出されてしまったうえに、全面戦争が覆いか

文学に新しい意匠など必要ない。だが言葉で生きる人間には、語るべきこと、語り残すべきことがある。その語るべきことを語った二〇世紀の大作がグロスマンの『人生と運命』だ。

西谷修

ワシーリー・グロスマン
『人生と運命』
齋藤紘一訳
を読む



モスクワに戻る科学者たちの集団、スターリングラードの戦場、ドイツ軍官、ス

人作家の畢生の大作は封印された。たしかに『収容所

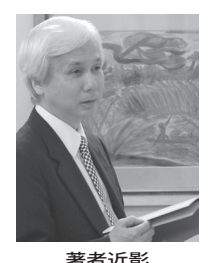
グロスマン『人生と運命』
『全巻完結』1 四五一五
円 2・3 各四七二五円

天然資源は貧困への罫か
繁栄への鍵か?

ポール・コリアー
『収奪の星 天然資源と貧困削減の経済学』
村井章子訳

天然資源を貧困削減にどうやって役立てるのか? 『資源の罫』を逃れ、最貧国は繁栄を享受できるのか?

環境保全の絶対視でもなく、経済学的な功利主義価値観のみでもない、地に足のついた中庸の道を探りつつ、途上国における資源産業の実態を踏まえて、数々の具体的方策を示す。



著者近影

れたままでいることを容認するならば、貧困の撲滅はできないだろう。また世界の一部が取り残されたままなら、自然の管理に必要な国際協力は実現しないだろう。

美術展評や日曜版連載企画など、長く美術記事を書いてきた練達の新聞記者が、世相の片隅に息づいている美を手がかりに、現代社会を照射している同名人気コラムの単行本化。

世相の片隅に息づく美をめぐって

芥川喜好『時の余白に』

大人の本棚

小野二郎 川端康雄編
『ウイリアム・モリス通信』

惜しまれる早世から三十年。モリス研究の第一人者にして晶文社創業の名編集者が装飾デザイン、社会主義思想

月刊雑誌
『みすず』 最近号より

『読書アンケート特集』 榎木伸明/加藤尚武/中井久夫/酒井忠康/原武史/保坂和志/根岸隆夫/高橋悠治/最相葉月/飯田隆/加藤典洋/田中純/大竹昭子/野家啓一/國分功一郎/上野千鶴子/三中信宏/田崎晴明/沼野充義/大野克嗣/早川尚男/小沼純一/藤山直樹/亀山郁夫

国境を越えた医師が問う
第三世界の医療問題

ポール・ファーマー
『権力の病理 誰が行使し誰が苦しむのか』
豊田英子訳 山本太郎解説



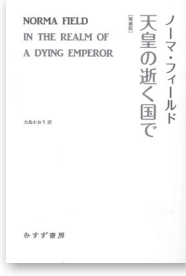
世界人権宣言は現実の適用段階では対象を選ばず。医療の倫理を扱う学問が、脳死などの問題に偏り第三世界の貧困者の生死にかかわる医療問題を取り上げないのは欺瞞ではないのか。数々の盲点をつきつづ本書は、最も窮乏する人々と1%の富裕層からなるこの世界が必然ではないことを示す。当事者による異議の声は、通信手段の発達により、以前のように抑圧される一方ではない。生き延びる特権を与えられた者には、その声を聞き届ける義務があると著者は説く。医療、開発関係者を中心に読み継がれる名著の日本語版。『四月中旬刊』

始まりの本

始まりとは、始原。未来への指針のために、いったん始原へ立ち帰って何度でも読み直したい、現代の古典シリーズ。



ハンディな判型・価格に改め、新解説
ミシェル・フーコー
臨床医学の誕生
神谷美恵子訳
齋藤環解説
3990円



あれから20年余、新たな長文のあとがきを付す
ノーマ・フィールド
天皇の逝く国で
[増補版]
大島かおり訳
3780円



初書籍化。初期アドルノの根幹
T.W. アドルノ
哲学のアクチュアリティ
細見和之訳
3150円

補論2篇、地図5葉を増補。主著決定版
原武史
可視化された帝国
近代日本の行幸啓 [増補版]
3780円

原著新版にもとづき、70頁余の新解説
C.P. スノー
二つの文化と科学革命
松井巻之助訳 S. コリーニ解説
2940円

現代文明予見の書、待望久しかった復刊
ガンサー・S. ステント
進歩の終焉 来るべき黄金時代
渡辺格他訳 木田元解説
2940円

戦後思想が生んだ金字塔。巻末に著作目録
藤田省三
天皇制国家の支配原理
宮村治雄解説
3150円

共同性の存在論を問う、幻のデビュー作
ハンナ・アーレント
アウグスティヌスの愛の概念
千葉真訳
3150円

著者は一九二八年(昭和三)生まれの八十四歳。十歳でハルセン病国立療養所長島愛生園に入園、以来七十年余をこの地で暮らす。二十二歳で療友と結婚。さまざまな後遺症を持ちながら、園内購買部の経理責任者等として働きつづけた夫を主婦として支え、家事と読書を楽しみながら慎ましく暮らしてきた。

「本は親友だったけれども、自分が書くなんて思ってもみなかった」が、八十を迎える頃から、習いおぼえたワープロで少しずつ文章を生みだしていく。

家族の愛情に包まれて過ごした幼少期。発病によって故郷を離れ、冷酷な寮監のもと孤児のような気持ちで過こ



辰巳芳子氏(左)と著者

島で暮らした七十年

宮崎かつこ
《長い道》

少女時代。『モンテ・クリスト伯』を読みふけり、大海原に心遊ばせた頃。夫のために料理をし、ミシンを覚え裁縫に精出した日々。心の支えだった親友の最期。遠い道のりをいつまでも会いにきてくれた母への思い。

著者が綴り、語る、現在に至る歩みは、繊細な表現力に富み、往時の暮らしが生き生きと伝わってくる。一人の女性の人生の物語であると同時に、貴重な時代の証言であり、読後、不思議な温かさに包まれる。

著者の生き方と言葉に深くうたれ、交友が始まった料理研究家辰巳芳子氏との対談を付す。【四月上旬刊】「エッセイ」(四六二頁・予価二五二〇円)

シリーズ 始まりの本

何度でも読み直したい現代の古典。第3回配本では3冊を新組み・新編集・新解説でお届けします

地方農民のミクロコスモス

カルロ・ギンズブルグ
杉山光信訳 上村忠男解説
《チーズとうじ虫》
16世紀の粉挽屋の世界像

「すべてはカオスである、すなわち土、空気、水、火のすべてが渾然一体となったものである。この全体は次第に塊になっていった。ちょうど牛乳のなかからチーズができるように。そしてチーズの塊からうじ虫が湧き出るように天使たちが出現した。そして至上の聖なるお方は、それらが神であり天使たちであることを望まれた」。かく語るメソキオとは何者か。異端審問記録ほか理もれた古文書を駆使して地方農民のミクロコスモスを浮かびあがらせたギンズブルグ史学の初期傑作。【四月上旬刊】「歴史・思想」(四六三頁・予価三九〇円)

聴き取られる世界

ジャック・アタリ
金塚貞文訳
《ノイズ 音楽/貨幣/雑音》

「西洋の知は、この二十五世紀というものを世界を見ることに汲々としてきた。……世界は読み取られるものではなく、聴き取られるものなのだ」。生きた世界からは音が聞こえる——労働の槌音、人間のざわめき、自然の物音、人間と音・音楽との関係こそが、社会を告知し、未来を予言するものなのだ。中世のジョン・ゲルハルト、パトロンお抱え・天才作曲家モーツァルトとバッハ、現代のロックスター……音楽と社会の編成史を通して著わされる

患者があつて理論が生まれる

霜山徳爾
妙木浩之解説
《素足の心理療法》

「心理療法の歴史を顧みると、始めのうちこそ患者があつて理論が生まれてきた素足の時代があつたようである。次第に大いには誰でもまず自分の気に入った理論という靴をはいて患者を診るようになってきた」

既成の心理療法の主義・技法にとらわれず「素足」であるというところ。それが心理療法家霜山徳爾の流儀である。「共感性」「畏敬性」など、心理療法のエッセンスが詰まった一書に、これまで単行本未収であった論考を加え刊行する。【四月上旬刊】「心理学」(四六三頁・予価三二五〇円)

汎用性の高い、定評あるテキスト

ダニエル・ジル
田辺・中村・松縄訳
《通訳翻訳訓練 基本的概念とモデル》

世界中の大学で通訳・翻訳訓練に用いられ、数多くの研究者に引用されてきた名著。通訳・翻訳プロ教育の指針と、問題の理解から解決への基礎を提供する。

概論から始まり、通訳・翻訳におけるコミュニケーションの基本問題、迫真性と忠実性について、方略とその背後の規範、アドホックな知識獲得、エラーの原因、認知と言

【三月下旬刊】「外国語学」(A5判・376頁・五二五〇円)

兆民の初公刊書翰はじめ177名824通

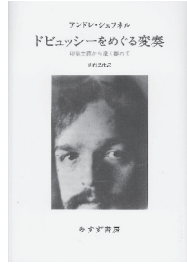
早稲田大学文学部
資料センター編
《大隈重信関係文書 8》

「又々阿堵物に事欠き汗顔之至に御坐候得共御高底奉仰候。……近著経緯問答は赤坂之言にどうやら多分に售られそふに御座候間、追々少許之収入も可有之と相楽居申候」(中江兆民書翰 明治二十年七月)。これは生活に困窮している兆民が、大隈に無心し、近刊の「経緯問答」が売れそうだと期待を込めておこったものである。

一年に一冊、全10巻・別巻1の構成で、大隈重信に宛てた書翰から日本近代を伝える文書。本巻には、兆民の初公刊となる書翰はじめ、主にヨーロッパから大隈に宛てた徳富蘇峰の七四通、鳥居龍蔵のモンゴル報告、新島襄、新渡戸稲造、膨大な量の鍋島直彬書翰など、一七七名・八二四通を収録。【日本近代史】(A5判518頁・二〇五〇〇円)

ドビュッシー生誕150年 シェフネルの名著刊行

『ドビュッシーをめぐる変奏』印象主義から遠く離れた(山内里佳訳、三九九〇円)が待望の刊行を迎えました。レヴィ・ストロースが讃辞をよせた、優れた音楽学者アンドレ・シェフネルが、音楽以外の諸芸術への探求を組上に、ドビュッシーの創作を芸術史の困り込みから解放させた先駆的研究。不朽の名著。



大人の本棚 10周年

《大人の本棚》が昨年12月、十周年を迎えました。記念に5冊を同時刊行(岩田宏『アネケイルコ村へ』野尻抱影『ろんでん怪盗伝』北條文緒『猫の王国』服部文祥編『狩猟文学マスタリー』スズキ折久美子『美しい書物』各二七三〇―二九四〇円)。

各地の書店では十年間の書目を展示するフェアが開催されました。目にはやさしく、持つてうれしい造本、瀟洒な装幀の並ぶ様に、蔵書の愉しみをあらためてご実感いただけたのではないのでしょうか。これからもぜひご期待下さい。

みすず書房 営業部だより

一月刊「みすず」の新年号は毎年、「読書アンケート特集」となっています。著名な先生方一五〇名近くのご回答が掲載されることから、これをもちにフェアを展開する書店も多くあり、良書と読者との出会いの場にもなっています。昨年は大震災の起こった年ということもあって、地震や原発に関する書籍が多く取り上げられています。中井久夫『災害がほんとうに襲った』http://www.msuz.co.jpより、どうぞお申し込み下さい。

自己の分析

コフート 自己愛パーソナリティ障害の精神分析的治療理論を系統的に展開。現代ナルシズム研究の代表作。水野・笠原監訳 ¥7035

自己の治癒

コフート 自己心理学の立場から精神分析的治療の本質を論じる。内省と共感にもとづく著者の実践の到達点。本城・笠原監訳 ¥7035

自己の修復

コフート 欲動の心理学から自己の心理学へ。断片化した心に喜びをとりもどす新しい分析理論の成立を宣言。本城・笠原監訳 ¥7035

基本図書限定復刊

【4月10日刊】

精神病理学原論

ヤスバース 初版1913年。本書がクレペリンの自然科学主義精神医学を克服し、新時代の体系の礎石を築いた。西丸四方訳 ¥6090

精神医学は対人関係論である

サリヴァン 成長の各発達段階において、対人関係の重要性を説明する。著者の死後に出版された最初の講義録。中井久夫他訳 ¥7980

みすず書房・最近の重版より

- 蜜から灰へ〈神話論II〉 C. レヴィ・ストロース 早水洋太郎訳 ¥8820
- 美徳なき時代 A. マッキンタイア 篠崎 榮訳 ¥5775
- ロマン・ロラン伝 1866-1944 B. デュシャトレ 村上光彦訳 ¥9975
- 詩の樹の下で 長田 弘 ¥1890
- ヨーロッパ戦後史 下 1971-2005 T. ジャット 浅沼 澄訳 ¥6300
- 戦後日本デザイン史 内田 繁 ¥3570
- 色彩の表記 A. H. マンセル 日高杏子訳 ¥1890
- 科学革命の構造 T. S. クーン 中山 茂訳 ¥2730
- 福島原発事故をめぐって いくつか学び考えたこと 山本義隆 ¥1050
- これが見納め 絶滅危惧の生きものたち、最後の光景 D. アダムス他 ドーキンス序 安原和見訳 ¥3150